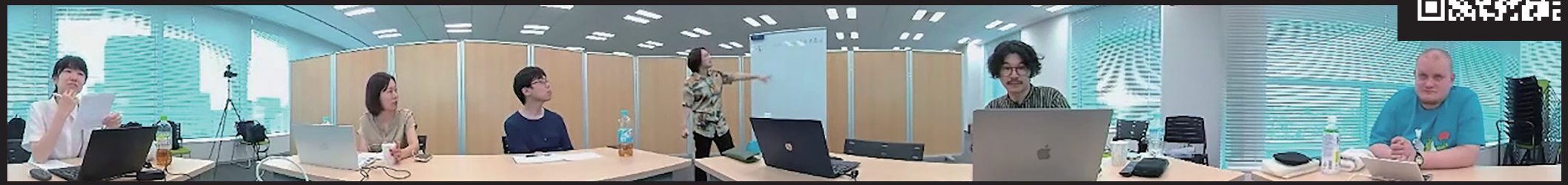
人間文化研究機構ワークショップ

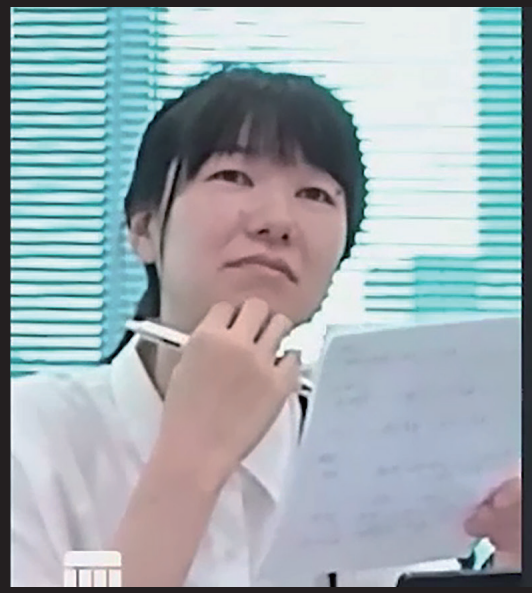
異分野間で構想する共同研究の可能性
——そのバリエーションをひらく対話の場

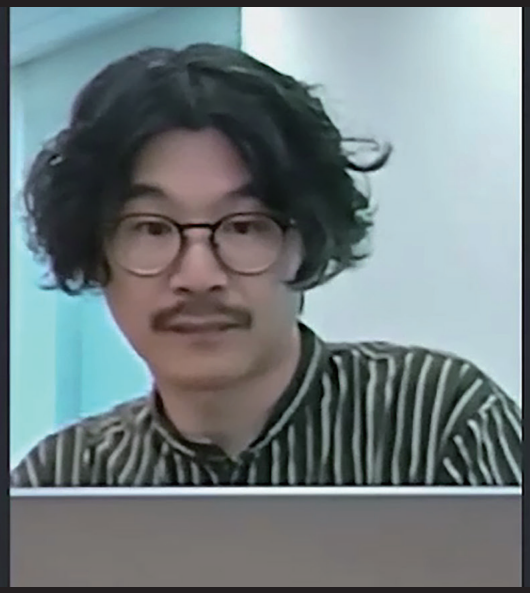
会場：**FabCafe Tokyo 2F**
〒150-0043 渋谷区道玄坂 1 丁目 22-7 道玄坂ピア

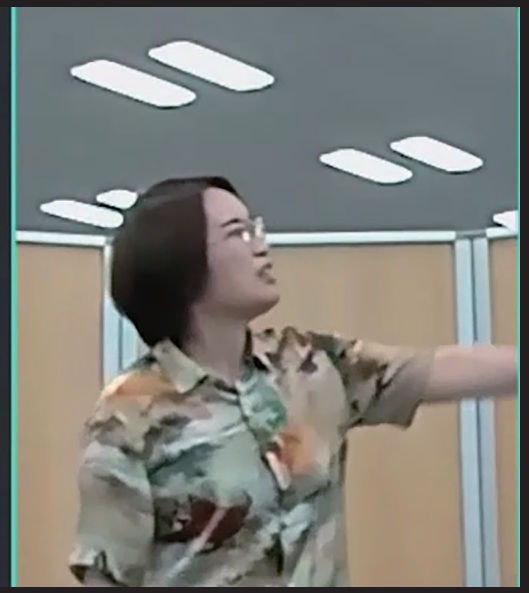
会期：2025 年 **8 月 19 日（火）13:00-18:00**
見学方法：事前申し込み（Google フォーム）が必要（15 名まで）

見学の申し込みフォーム









主催：人間文化研究機構 共同研究プロジェクト「イマジナリー・ダイアローグ：映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際的実践」
人間文化研究機構 共創先導プロジェクト・共創促進事業

開催趣旨

異なる専門が出会うとき、どんな「問い」が生まれるのでしょうか。

このワークショップは、人間文化研究機構（人文機構）の人文知コミュニケーター※1らが主宰する共同研究プロジェクト「イマジナリー・ダイアローグ：映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際的実践」（代表者：澤崎賢一、2025 年度〜）の一環として実施されます。このプロジェクトは、映像・対話・芸術表現を通じて、分野や立場を越えた「問い」の創出プロセスを可視化し、学際的な知の可能性を探る実験的実践です。

今回のワークショップでは、自然科学・人文学・社会科学・芸術など、多様な領域にまたがる研究者たちが集まる、構想的対話の場を創出し、まだ実現されていない共同研究のアイデアを持ち寄り、即興的にふくらませながら、新たな関心や問いのかたちを探っていきます。

また、このワークショップはセミクローズド形式での開催となり、見学参加には事前申込が必要です。この場は、完成された成果を提示するものではなく、むしろまだ方向性も結論も見えない状態での、揺らぎや拡散をともなう「構想的対話」にこそ価値を置いています。そのため、議論が噛み合わなかったり、途中で逸れたり、問いがまとまらないまま終わることも十分にありえます。そのため見学参加をご希望の方には、そうした実験的で不確定な場の性質をご理解のうえで、「いままさに生成されつつある問いのプロセス」に関心を持ち、かつその不確定性そのものを楽しむ余白を受け入れていただける方に限らせていただきます。

当日は、事前に共有しておく参加研究者のそれぞれの専門やこれまでの研究を前提に、同じく事前に各研究者によって準備される共同研究案の提示を出発点にします。そして、当日の対話の流れの中から、その場で新たに思いついた問いや構想を即興的に共有し合います。ここで私たち大切にしたいのは、実現可能性の検討ではなく、あくまで「こんな研究もありえるかもしれない」という構想的な思索の交差です。ひとつの問いが別の問いを引き寄せ、意外な組み合わせから新たな可能性が立ち上がる――そんな偶発性や未分化の思考の芽生えにこそ、未来の学際的研究の原点があると私たちは考えています。

このような思索的対話のプロセスを、私たちは〈イマジナリー・ダイアローグ〉と呼びます。これは、目的が定まった研究の実行ではなく、構想の段階にあえてとどまりつづける方法論的な実験です。成果や実装を急がず、思考や感覚が揺れる「余白」に留ることから、対話的な知の可能性を拓こうとする試みです。

当日のワークショップの様子は映像で記録され、後日、参加者のふりかえりやレポートと共に、アート表現・編集デザイン・AI ツールなどを活用して多角的に分析・再構成されます。議論の中から立ち上がったプロジェクト案や共有された問い、さらには共感に至らなかった問題意識までを記録し、それらを可視化・アーカイブ化した成果物（構想案、キーワード群、ビジュアルイメージ、テキスト等）は、今後の新たな対話と協働の場づくりのための資源として活用していきます。

まずは問いの手前に立ち止まり、誰かとともに考えてみる時間を、ぜひご一緒ください。

澤崎 賢一

プログラム

12:45 - 13:00	開場
13:00 -13:30	**趣旨説明** 澤崎 賢一（アーティスト・映像作家／総合地球環境学研究所）
13:30 -18:00	**〈イマジナリー・ダイアローグ〉** 「もしこれから我々参加メンバーが協働して共同研究を行うとしたらどんなプランが考えられるか」を参加者全員でディスカッションします。実際に共同研究を実施することが目的ではなく、むしろ実現に向けて急がず、仮想的なアイデアにとどまり続けることで「想像的な可能性の幅」を保つことがねらいです。 ※各参加者の自己紹介、研究内容は事前に共有しておきます 13:30 -13:45　参加者の研究内容について質疑応答 **13:45 -15:00　事前に用意した共同研究プランの発表**（約 10 分 × 8 名） **15:00 -16:00　共同研究プランについてコメントし合う** 16:00 -16:15　休憩 **16:15 -17:00　最も関心の高い共同研究プランを選択する**（1 〜 3 案） ・自分が中心となって進めてみたい共同研究はあったか？ ・あった場合、それはどれか？ **17:00 -18:00　選択した共同研究プランについて意見交換** ・あくまで可能性を議論 ・実現できるかどうかはいったん横に置く ・結論を急がない ・アイデアをたくさん出す
18:00	終了

※1 人文機構「人文知コミュニケーター」とは？

人文知コミュニケーターは、人文機構が養成する社会と研究をつなぐ研究者です。人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝えるだけでなく、社会の声や関心、現場の感覚を丁寧にすくい取り、それを研究へと還元する役割を担っています。展示、映像、出版、ワークショップなど多様なメディアや機会を活用し、研究と社会の双方向的なつながりをつくり出すためのコミュニケーションの実践に取り組んでいます。

加えて、近年ではこの役割を単なる「発信」や「広報」にとどめず、異なる分野の研究者や表現者をつなぎ、未分化な問いや構想を対話的に育てていく知的実践として発展させる動きも広がっています。今回取り組むワークショップのように、すぐに成果へと結びつけるのではなく、揺らぎや摩擦のなかにある創造性に注目しながら、知と知のあいだにある関係性や過程そのものを記録し、再構成し、共有することも重要な役割です。

つまり、人文知コミュニケーターは、人文学を基盤にしながらも、分野横断的な問いの生成、協働の場の設計、表現を通じた思索の触媒としても機能する、「知の媒介者」であり、「創造的な対話の設計者」でもあります。

■現在の構成メンバーは以下（状況によってメンバーの入れ替わりの可能性あり）。

【代表者】澤崎 賢一（総合地球環境学研究所）、大場 豪（人間文化研究機構）、河田 翔子（国文学研究資料館）、工藤 さくら（国立民族学博物館）、駒居 幸（国際日本文化研究センター）、ヌラディ ラディティヤ（国立歴史民俗博物館）、横山 晶子（国立国語研究所）

参加者プロフィール

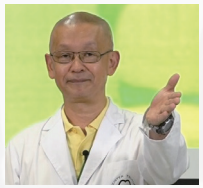
五十音順

岡村 麻子（政策研究／文部科学省科学技術・学術政策研究所）

科学技術イノベーション政策に関する調査研究に長く携わってきました。現在は国の研究所で、中長期的な未来の科学技術と社会を見通すフォーサイトに取り組んでいます。若者や市民の未来への願いを探るビジョニング調査や、将来課題に関する専門家の知見を集めるデルファイ調査、世代や分野を超えた未来シナリオ作りなどを行っています。科学と社会の理想的な関係や責任ある研究・イノベーション（RRI）にも関心があります。

石河 睦生（医用工学・人間工学／桐蔭横浜大学）

桐蔭横浜大学医用工学部 専任講師。桐蔭横浜大学工学部卒業、桐蔭横浜大学大学院工学研究科修了、東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）2006 年。超音波に関する研究をテーマに、東京工業大学大学院日本学術振興会特別研究員、東京大学大学院新領域創成科学研究科特任助教、南カリフォルニア大学 NIH 客員研究員を経て 2011 年 4 月より現職。研究と教育と事業化と。ピンチはチャンスと思い込んで邁進中。



一ノ瀬 俊明（地理学／国立環境研究所）

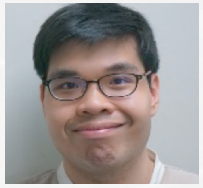
1963 年長野県生。国立研究開発法人国立環境研究所シニアリサーチアドミニストレーター。名古屋大学大学院環境学研究科客員教授。中国上海・華東師範大学顧問教授。東京大学大学院工学系研究科修了。工学博士。林野庁技官、東京大学助手などを歴任し、つくばへ。1998 年度にフライブルク大学客員研究員として在独。平成 28 年度環境科学会学術賞。つくば科学教育マイスター第 6 号認定。都市気候とそれに関連する快適性を志向した街づくりの研究に取り組む。

河田 翔子（中世説話文学／国文学研究資料館）

2023 年鶴見大学大学院文学研究科日本文学専攻で博士（文学）を取得。鶴見大学非常勤講師、国文学研究資料館・プロジェクト研究員（情報事業センター学術資料事業部）を経て、現在は人間文化研究機構・人間文化研究創発センター研究員（人文知コミュニケーター）兼国文学研究資料館・特任助教。専門は、日本の中世説話文学。特に古記録・古注釈にみえる説話的要素の研究。近年は中世成立の『古今和歌集』の注釈書（古今注）について研究中。

工藤 さくら（宗教学・文化人類学／国立民族学博物館）

2019 年、東北大学大学院で学位取得（宗教学）。専門は、宗教人類学（宗教学＋文化人類学）で、ネパールのネワールという人びとの儀礼や信仰に関わる事象について研究しています。もともとお祭りが好きだったことがこのテーマに結びついていると思います。ネパールとの出会いは、大学 2 年生の時のインド・ネパールへの貧乏旅行がきっかけです。好きなことは山歩き。毎日欠かせないものはチア（スパイスミルクティー）です。



ヌラディ ラディティヤ（宗教学・日本学／国立歴史民俗博物館）

国立歴史民俗博物館の人文知コミュニケーターのヌラディです。専門は宗教学、日本学。現代宗教とポップカルチャーの関係性の研究しており、特に聖地巡礼のエスノグラフィーなどをしております。宗教学以外にバックグラウンドは日本学全般なので歴史学、文学、文化人類学にも関心あります。日英の翻訳者でもあり、ポッドキャストホストでもあります。

藤戸 尚子（進化生物学／新潟大学脳研究所）

ヒトの病気に関わる遺伝子がどのように進化してきたのかをゲノムデータの集団遺伝学解析によって研究しています。ゲノムには生物の経験してきた過去出来事が刻まれており、進化の過程を読み解くことができます。進化の視点でヒトや動物のゲノムを読み解くことで、現代社会が抱える課題に新たな光を当てられるのではないかと感じています。他分野との対話を通じて、複雑な課題の解決に必要なピースを探っていけたらと思います。

横山 晶子（言語学／国立国語研究所）

国立国語研究所研究系特任助教、人間文化研究機構人文知コミュニケーター。いま話す人が少なくなっている「危機言語」の文法記述、記録、継承研究を行っています。特に、国内の危機言語の一つである奄美群島・沖永良部島で、住民主体によることばの記録と継承活動に力を入れています。今年度もっとも力を入れたいのは、「新しい話者」の育成と、AI を活用した言語記録の取り組み。好きなものは火鍋とマッサージです。

進行／運営

大場 豪（西洋建築史／人間文化研究機構）

2015 年に東北大学大学院工学研究科を修了後、国の教育・研究機関に勤務。2022 年から人間文化研究機構人間文化研究創発センターの研究員として、機構の国際連携や広報、人文系の若手博士人材「人文知コミュニケーター」の養成、大学共同利用研究教育アライアンス（IU-REAL）の各委員会の委員を担当。2025 年 8 月までに国籍や文理を問わず様々な分野の研究者 26 名にインタビューを実施。記事は「NIHU Magazine」や「STI Horizon」誌等にて掲載。

駒居 幸（日本近現代文学／国際日本文化研究センター）

京都にある国際日本文化研究センターの特任助教・人文知コミュニケーターです。専門はカルチュラル・スタディーズ、日本近現代文学で、現代文学における女性・犯罪・労働の表象について、桐野夏生の文学作品に焦点を置いて研究を進めてきました。最近は、異分野融合研究、特に、情報学とともに研究を進めるデジタルヒューマニティーズにも関心を持っています。

澤崎 賢一（アーティスト・映像作家／総合地球環境学研究所）

映像を中心とした現代美術をベースにしながら、新たな芸術文化パラダイム創造のために、積極的に異分野や異文化の人々と共同でプロジェクトを行っている。主なプロジェクトに、「暮らしのモンタージュ」（2018- 現在）、「ヤングムスリムの窓」（2022- 現在）など。主な展示・作品に、展覧会「語りかける庭」（有斐斎 弘道館、京都、2025）、展覧会「すべてのものとダンスを踊って―共感のエコロジー」（金沢 21 世紀美術館、2024-25）、映画『# まなざしのかたち』(124 分、2021)、劇場公開映画『動いている庭』(85 分、2016) など。京都市立芸術大学大学院 博士（美術）。